

校名：北海道教育大学附属釧路中学校

所在地：〒085-0805 北海道釧路市桜ヶ岡7丁目12番2号 **電話番号**：0154-91-6857

記載日：平成28年5月10日 **記載者**：水野秀哲 **記載者役職**：副校長

校風、おおまかな特色について

- 昭和44年開校 平成16年より国立大学法人北海道教育大学附属釧路中学校に改称 国内でも設立が新しい「若い」附属中学校である。同じ敷地内に附属釧路小学校がある。
- 日本の最も東端に位置する附属学校であり、北海道東部（道東）地域（釧路、根室、十勝、オホーツク）に唯一の附属学校である。
- 開校以来「授業で勝負」を合い言葉に、生徒は授業が、教師は教育研究が楽しくて仕方が無いという気風をもった学校
- 時代に即応した、時代を先取りした教育課程の編成に努めてきた。
- 生徒の3分の2は附属小からの連学入学、3分の1は公立小学校からの入学である。素朴で素直な生徒が多い。気持ちの良い挨拶等、当たり前のことを真面目にやろうとする生徒が多い。



特別天然記念物「丹頂」が生息する
日本最大の湿原：釧路湿原

卒業生の活躍状況について

- 平成27年度までで、5380名の卒業生を送り出している。
- 開校30周年記念に際し、名簿を作成しているが、それ以降のデータについては整理されていない。
- 特に追跡調査は行っていないが、地元の政治・経済・医療の中核を担う人材を輩出している。
- 本校を卒業した同窓意識が強く、成人してからも中学校時代のネットワークで、互いに連絡を取り合っていることが多い。

勤務経験者が公立学校・教育委員会などへ戻った後の状況について

- 年に一度、本校に教員として在籍した者が一同に介し、近況を報告する機会を設けている。また、その出欠連絡の際に、連絡先や勤務先の変更、他の者の情報等を確認し、その結果を名簿として整理・管理している。
- 北海道教育委員会指導主事、釧路市教育委員会、公立小中学校教頭等として転出し、その後、教育局長や義務教育指導監、公立学校校長など、北海道教育の中核を担う人材として活躍している。また、一般教諭として転出した者も、多くは各学校の教務主任、研究主任等、モデルリーダーとして活躍し、その後行政職や管理職へ向かう者も多い。

魅力、特色のある、または今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取組などについて

■パイロットスクール 地域のモデル校

開校以来、道東地域唯一の附属学校として、「パイロットスクール」を掲げて、教育研究を進めてきた。現在は「地域のモデル校」として、実践成果、実践方法等を積極的に発信し、「出前授業」や自校研修の「講師」等、地域から「活用してもらおう」附属学校をめざしている。

釧路市内外にこだわらず、十勝、根室、オホーツク管内の公立学校と連携を図りながら、機会をいただいて本校の実践や研究内容を伝え、その学校の研究や授業の質の向上、地域教育の推進に一石を投ずることができていると自負している。

市内公立中学校の教諭と各教科における共同研究をすすめ、教育研究会の際にはその成果を発表している。さらに各教科の教育研究団体とも連携を深めつつ、本校の研究成果をオープンにして、積極的に活用してもらいながら、公立校で実践してもらおう機会を増やしていきたい。

■ホームページによる情報発信

本年度より、ホームページ上に全教科・道徳の「授業案」を掲載している。日頃の授業づくりの一助になるような情報の発信に努めている。今後も、発信内容の質と量について、改善を図り、カリキュラムや小中一貫教育についても情報を発信していく予定である。

http://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_kus_chu/study/kyouka/

■キャリア教育プログラム

①職場体験活動（第1学年6～8月、18時間 第2学年5～7月、25時間 総合的な学習の時間）

地域（主に釧路市の事業所）と連携し、職場体験活動を実施する。1年生は1日間、2年生は連続3日間の体験活動を行い、勤労観・職業観を育成する。各学年とも事前学習の実施、報告書の作成、学級内座談会を実施する。

②卒業研究（第3学年通年、45時 総合的な学習の時間）

1、2年時の職場体験活動やこれまでに学習した各教科等の学習経験を踏まえ、中学校生活の集大成として、自分の興味・関心に基づきテーマを設定する。計画的にこだわりを持って取り組む。追究活動では、資料収集や地域・専門の方への訪問調査、フィールドワークなどの校外活動を可能とする。研究の成果として、個人論文を作成し発信している。

■3年間を通して行う系統的な旅行宿泊的行事

3年間で4度の旅行宿泊的行事を位置付けている。集団づくり、学ぶ体制づくり、耐性、自主性、自律的な態度の育成等をねらいとし、宿泊研修Ⅰ～宿泊研修Ⅳを発展的、系統的に位置付けている。

特に、平和教育の観点も加味した宿泊研修Ⅲでは、第2学年で長崎へ向かい、事前学習から平和の意義について学ぶとともに、毎年「附中平和宣



言」を採択している。その内容は、代表者が作成するのではなく、第2学年全員の言葉が入る

第46期生 附属釧路中学校平和宣言

終戦から70年という節目の年を迎えた今年。私たちは戦争を昔のことだと思い、自分事として考えることができていませんでした。しかし、今も当時の辛い記憶や、後遺症に苦しめられている人が多くいることを知りました。そして被爆者の平均年齢は80歳と高齢化が進み、原子爆弾の悲劇を後世に伝えていくことが困難になっていることも分かりました。だからこそ、私たち若者が日本人として平和を発信していくことが重要なのではないのでしょうか。悲劇を昔話にしてはいけないのだと強く思います。

1945年8月9日午前11時2分、長崎県松山町の上空500mで原子爆弾が爆発しました。死者は73,884人、負傷者は74,909人、合計約148,000人と当時の長崎市の人口24万人の半分以上もの方々が被害に遭いました。特に被害が大きかったのが、放射線による被害です。放射線による初期障害をはじめ、後遺症に苦しんでいる人は、今でも多くいます。苦しみの原因となった核弾頭は、現在世界で約16,000発もあります。また、平和とは正反対の戦争や紛争が各地で起こっています。私たちが自分事として受け止めない限り平和の重要性を発信していくことはできません。

私たちが暮らす北海道から遠く離れた長崎に対して直接何かをするのは、難しい事かもしれません。しかし、私たちにも「繋ぐ」ことはできます。戦後、70年経った今、あの日の出来事を知っている人は少なくなりつつあります。これからの未来に、あの日の出来事を伝え繋いでいくこと、そして今を精いっぱい生きることが私たちの使命でもあり、今できることでもあります。私たちは現在平和に過ごしていることに幸せを感じ、感謝の気持ちを持って毎日を精いっぱい生きていきます。

今、私たちは戦争におびえることのない生活をしています。核兵器の脅威を実際に体験したことはありませんし、戦争が行われているのを直接見ることもありません。平和は嬉しい事です。しかし、「平和に慣れてはいけない」、私たちは長崎の人たちの痛みを学び、そう痛感しました。慣れてしまっただけでは、後世に伝えるどころか、その事自体をも忘れてしまうかもしれません。私たち北海道教育大学附属釧路中学校第46期生一同は、長崎で起こった過去を忘れず、将来悲惨な歴史が世界で繰り返されることがないように、核兵器の脅威を後世に伝え、繋ぎ、日々の幸せに感謝して今を精一杯生きることがここに誓います。

平成27年12月2日

北海道教育大学附属釧路中学校第46期生一同

↑ 毎年その学年の思いを込めて作成される「平和宣言」。英訳もされる。
http://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_kus_chu/event/syukuhaku.html

形にしており、平和公園での平和セレモニーにて第2学年全員で宣言している。この研修では、事前に釧路在住の被爆2世の方の講演、動画資料による原爆被害の状況等の理解を深める学習を行う。その上で、現地での被爆体験者の取材、原爆資料館の見学等を通し、平和の尊さを「実感」できる、いわば「ホンモノ」を体験する研修となっている。その取組はユネスコスクールにもつながっている。

■積極的な部活動の展開、文武両道を基本とした学校生活、自治的な力を養うための生徒会活動等、知徳体のバランスのとれた人間形成を目指している。

本校で目指す生徒像

は目指す「**人間像**」であり、それは教育目標に端的にあらわれている。その具現化を目指し、全職員が今求められていることと、課題とすべきことを教育課程内に反映させ

北海道教育大学附属釧路中学校 教育目標

■1 たくましく生きる人間

心身を鍛える 積極的に生活場面を切り拓く 耐性を身に付ける 高い向上心をもつ

■2 創造することのできる人間

科学的に見つめ、考える 創造性を発揮する 応用力を身につける
ものごとを発展的にとらえる つくりだす喜びをもつ

■3 個性をつくりあげていく人間

自主的、自発的に行動する ユニークさを大切にする 自分の長所をより伸ばす

■4 共に高まろうとする人間

協力してプロジェクトを遂行する 集団の成員であることに喜びと誇りをもつ
集団の向上のため積極的に行動する

■5 広く豊かな心をもつ人間

誠実で他を思いやることができる ユーモアや美的センスをもつ 視野を広げる
大きい夢を抱く

ながら教育活動を展開するようにしている。それは画一的な姿を求めているのではない。個性を埋没させることなく、これからの時代を強く生き抜いていける素養を身に付けた中学生を育成しようとしている。

■経営参画意識が高く、組織力を生かした経営

常に「目的」を意識してことあたり、教育課程の「評価改善」を行う。即時的で適切に教育活動へ反映する雰囲気があり、職員経営参画意識の高さが、強い組織力となってあらわれている。決して傑出した教員集団ではないが、組織力を高めることで学校の教育効果を高めようとしていることが本校の魅力である。

本校は、能力が高い生徒を集め、特別な教育を行う、いわゆるエリート養成校ではない。入学時、公立学校と大きく変わらない生徒集団からスタートし、教育研究とそれに基づく授業改善、同じベクトルを有する職員の組織力をもって教育効果を上げようとしている学校である。その意味において、本校での実践は、広く公立中学校でも受け入れることが可能であるし、十分に効果をあげるものであると考えている。

地域における附属学校の存在意義について

■道東地区の実態として、

- 地域が学校と連携しながら、子どもを育てようとする気風がある。
- 農漁村部と都市部で、教育や学力に対する理解・認識の差が大きい。
- へき地校・小規模校が多い。小中一貫に活路を見いだそうとする動きがある。

■その中において唯一の附属学校である本校は、地域の教育推進の拠点でなくてはならない。

- 「モデル校」として、各教科における、地域の教科研究（各教育研究団体との連携）、授業開発を行い、研究推進の中核を担う。
- 年間指導計画の作成等、時代を先取りした教科、道徳等の研究をすすめ、発信する役割を担う。

■学力の地域格差が大きい北海道、特に北海道東部地域（道東）、唯一の附属中学校として、地域の学力形成を牽引する働きを担っていると考える。

■地域の未来の人材を育てるべく、道東の教育を支える教員の養成（教育実習）を担っている。フィールド実習、基礎実習、教育実習Ⅰ（主免）、教育実習Ⅱ（副免）を通し、公立学校では難しい規模の実習生を受け入れている。

■また、この地域において、今後ますます増加するであろう小中一貫教育学校、義務教育学校等を見据え、附属釧路小学校とともに、その先駆的な取組を発信することが急務と考え、連携・一貫に向けての取組をはじめている。道東地域の特色を生かした、また本地域が抱える課題解決を目指した、小中一貫の在り方を模索し、より教育効果のあがる姿を提案していきたいと考えている。

■北海道教育委員会との連携をはかる「授業実践交流事業」を行っている。根室管内、十勝管内より授業等の要請を受けることも増えており、今後も「**地域に役立つ**附属中学校」として活用していただきたいが、地元釧路市での活用状況は芳しくない。さらに連携を強化する必要がある。